

永遠の命—誰が享受しますか 3

永遠の命—誰が享受しますか ルカの一連のたとえ話からの考察 ②ルカ 16:16-16:18
「律法は破棄されたのではなく、成就される」とはどういう意味でしょうか

この記事は前回の「不義の富」の例えの次の部分に関するものです。

そしてその後続く「金持ちとラザロ」の例えの間に挟まれた短い部分ですが、ここもまた、今一つ、分かるようでよく分からないと言う声をよく聞きます。

しかし、この点が明確になると、「誰が永遠の命を享受するのか」というこのテーマにもう一つ別の側面からの光が差してくると言えます。

では、まず、その部分を引用しましょう。

「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これに入ろうとしています。

しかし律法の一画が落ちるよりも、天地の滅びるほうがやさしいのです。」(ルカ 16:16,17 新改訳)
「律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている。しかし、律法の文字の一画がなくなるよりは、天地の消えうせる方が易しい。」(新共同訳)

(マタイ 5:17,18)「わたしが律法や預言者たちを破棄するために来たと考えてはなりません。破棄するためではなく、成就するために来たのです。…あなた方に真実に言いますが、律法から最も小さな文字一つまたは文字の一画が消え去って、記されたすべてのことが起きないよりは、むしろ天地の消え去るほうが先なのです。」

(ローマ 3:31) …では、わたしたちは自分の信仰によって律法を廃棄するのですか。断じてそのようなことはないように！ それどころか、わたしたちは律法を確立するのです。

要約しますと、「律法と預言者」の時代は終わり、すでに「王国」の時代に入っている。

しかし、天地が消え去ったとしても、「律法」の一つさえ、捨てられることはないということです。さて、注目したいのは、なぜ、ここの接続詞が「しかし」なのか。ということです。

「律法と預言者はヨハネまでです。」と言えば、律法は今や、終了した。捨て去られたのだと言っている、とたいていの人はそのように受け止めるでしょう。

「しかし」そうではなく、むしろその反対でさえあると言う風に、ここでは注意を促しているのです。

では、「律法」がヨハネまでで、それ以降「神の国」に皆が殺到しているというこの事実によって、「律法」が成就しているということであれば、(既存のキリスト教神学はほとんど、そうした解釈になっています)これもまた、「しかし」という語で、前節を否定して、その後で「律法は決して捨てられない」と述べるのも矛盾していると言えます。

もしそうであるなら、(今や、律法は捨てられたので、全ての人には「王国に入る」ために邁進することに転向すべきということなら)その後は「しかし」ではなく「ゆえに」「そのようにして律法の一画さえ消え去らないようにされたのです」と言うような論議の流れになるはずですが。

ですから、ここで「しかし」と前の部分を否定しているのは、「律法はヨハネまで」という言葉は

「律法は捨て去れた」という意味ではなく、そしてまた「律法」は「神の国に入る」と言うことで完全に置き換えられことによって成就した」という意味でもない。ということになります。

「神の国に入る」という、新たに導入された救いのための取り決めと「律法が成就する」というのが、イコールだと考えている故に、この聖句はよく分からない、意味不明な聖句となってしまうのです。そうではなく、「神の国に入るということ」は「律法が成就する」ということに包含される、という事だと気付けば、全体は良く意味の通る、論理にかなっていることが分かります。

「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これに入ろうとしています。それはあなた方が見ている通りです。「しかし」

100%「神の国に入るということ」だけが、「律法の成就」であり、全てであると見なしているとするればそれは違います。そうだとすれば、それでは、「律法の一画」が落ちてしまうということになり、それは、あり得ないことです。と、言われていると捉えることができます。

では、「律法の成就」とは何でしょうか。

端的に言ってそれは、創世記からのテーマである「罪が贖われて永遠の命を得る」というとに他ならないでしょう。

「律法と預言者」とは、基本的に人々をメシアに注目させ、キリストに導くために与えられたもので、そのキリストこそ「アブラハムの胤」の主要な方であり、そのことはこの一連の記事の最初のところすでに触れました。

ですから、この「律法と預言者」の目指す所にはやはり2つの要素（あるいは2つのグループ）存在します。

一つは「永遠の命を得させる」人々と「永遠の命を得る」人々です。

「王国に入る」人々は、先ず自ら「永遠の命」を与えられ、そしてその後、王また祭司として働く事により、王国の臣民に人々に「永遠の命」を得させる事になっています。

つまり律法を成就するとは、この2つの要素が完成して始めてそのように言えると言うことです。キリストは、自ら贖いを成し遂げ、キリストを認める人々に「永遠の命」の見込みを与え、そしてご自分の追隨者になるよう励まし、バプテスマを受けたクリスチャンを王国に招待することにより、「律法を成就された」ということが分かります。

従って、「王国に入る」ことだけでは、半分しか成就しないことになります。

「王国に入る」ということは、実際は、そのように神からの「召し」があると言うことです。

それはつまり「天への、神の国」への神からのご招待ということですから、単に勝手に自分の意志で「入ろう」として殺到するようなものではありません。

また彼らは天の王国の王として整えられ、地上の不完全な人々を完全の域にまで引き上げるという特別な目的のためのプロジェクトチームです。

ですから、天への召し以外に神の「召し」というものはありません。

キリストをメシアとして認めて受け入れるという意味で「信仰を働かせる」、地上で永遠の命を授かる人々は、当然のことながら「召し」を受けることはありません。

「天の神の国」に「入ろうと努めながら入れない者」が少なくないこと、を考えると、あるいは正確な知識のよらずにバプテスマを受けて、クリスチャンになったと自認している人々が自動的に聖霊で油注がれて、もれなく「召し」を受けるといえることはありえないでしょう。

さて、このテーマの聖句を考慮すると、もう一つ別の点も見えてきます。

「律法」が破棄されるのではなく、「成就」ということは、生来のイスラエル（人）も捨てられるのではなく、「成就」することになっていると考えるべきだということが分かってきます。

イスラエルを永遠に捨て去っては、「律法」は成就し得ないからです。

今考慮しているルカ 16:17 の次の聖句は、難解であると言われていますが、続く部分を熟考するとそのことが示唆されていると言えます。

改めて17節から引用しますと、「しかし、律法の文字の一点がなくなるよりは、天地の消えさせる方が易しい。」

この話した後、突然に、何の脈絡もないと思える次の言葉が続きます。

「妻を離縁して他の女を妻にする者はだれでも、姦通の罪を犯すことになる。離縁された女を妻にする者も姦通の罪を犯すことになる。」(16:18)

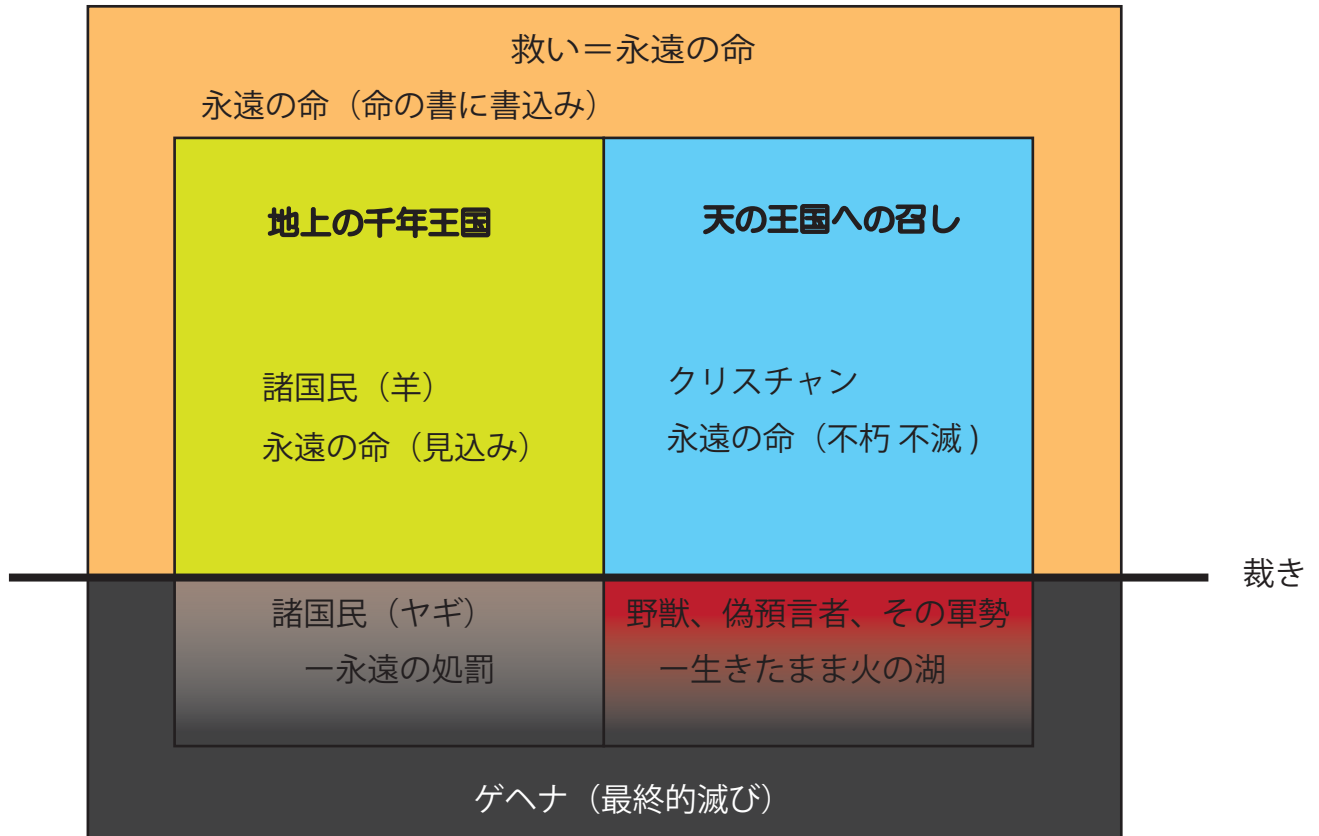
これは、「律法」中の掟の一例として、あるいは典型的、代表的なものの一つのとして挙げられているものと思われますが、単なるサンプルとしては、余りに唐突過ぎるように感じるの否めません。恐らく、これは、「律法は決して破棄されない」ということは「イスラエル人」も決して完全に捨てられた存在ではなく、律法を通してイスラエルとの契約を結ばれた神は、その関係を結婚関係になぞらえ、みづからを、「あなた方の夫」と表現している事と、関係しているのだろうと思われます。

つまり、イスラエルは完全に捨てられた「妻」ではない故に、多大の哀れみをもって、その祝福された関係に再び戻るという約束の現実性を、ほのめかしていると考えられます。

生来のイスラエル人が、このまま永遠に忘れ去られ、神との関係から切り立たれたまま終わるよりは、天地が消え去る方が先。つまりそれはあり得ないという保証の言葉と受け取って良いと思います。

このことは、ホセア書に随時示されている点ですので、ホセア書全体を、読んで見ると、よく分かります。

裁きの種別



上の図表の「諸国民 (羊)、諸国民 (ヤギ)」は 見慣れない表現だと思いますので、最後にこれに付いて解説しておきます。 黙示録の中で、千年王国に生き残るのは「諸国民」であるとされてます。また「地の王たち」もそこに存在しています。(これらの詳細については別資料：「ハルマゲドン以降の時と場所を考察する」をご覧ください。)

「この方 (キリスト) の口からは、鋭い剣が出ている。諸国の民をそれで打ち倒すのである。また、自ら鉄の杖で彼らを治める。[牧する (新世界訳)] (黙示録 19:15 新共同訳)

この聖句を考慮するに当たって、先ず、「鉄の杖」に関する理解を深めるために詩編 2 編を参照しましょう。

「なぜ諸国の民は騒ぎ立ち、国たみはむなしいことをつぶやきつづけたのか。地の王たちは立ち構え、エホバとその油そそがれた者に敵対し、・・・わたしは諸国の民をあなたの相続物として、地の果てをあなたの所有物として与えよう。あなたは鉄の笏をもって彼らを砕き、彼らを陶器師の器であるかのように粉々にする」。それで今、王たちよ、洞察力を働かせよ。地の裁き人たちよ、矯正を受けよ。恐れを抱いてエホバに仕え、おののきつつ喜べ。子に口づけせよ。神がいきり立ち、あなた方が道から滅びうせないためである。」(詩編 2:1-2, 8-12)

詩編2編は明らかにハルマゲドンにおける神の大いなる日の戦争の時の預言ですが、ここに「鉄の笏」を振るうことが描写されていますが、その結果には二種類の異なる結果があることが分かります。1つは「砕き、粉々にする」つまり「滅び」です。

しかし、この笏を使う本来の目的は、恐れを抱かせ、矯正を受け入れ、子に口づけして、滅び失せないようにすることです。

もし、「鉄の笏」が滅びを象徴するのであれば、キリストは、神から相続物としていただいた「諸国の民」をその直後に皆殺しにすることになってしまいます。

そのような本末転倒になることを意図されることはありません。

同様に、黙示録 19:15 の表現もやはり、二通りの行動が描写されています。

一つは口から出る剣で諸国の民を打ち倒すこと、そしてもう一つは、鉄の杖で彼ら（諸国民）を牧するという行動です。

この2つの区分が「左」と「右」に分けられる「ヤギ」と「羊」の区分でしょう。

ここで牧すると訳されている原語は ギ語：ποιμανεῖ [ポイマーネイ] で、この語は「羊飼い」を意味する ギ語：ποιμήν [ポイメン]を含んでおり字義的には「羊飼いの働きをする」という意味です。

ということは、少なくともここでは「諸国民に対して羊飼いの働きをする」ということですから、「諸国民」は「羊」とみなされていることが分かります。

真の羊飼いが、神から与えられた自分の羊を「皆殺し」にすることはありません。

キリストは、彼らをご自分の千年王国に導き入れ、優しく、そして恐らく時に厳しく、牧して、最終的に「永遠の命」を得られるように世話をされるということです。

そしてそのために、あの邪魔者である、サタンを無活動にします。

「悪魔でもサタンでもある・・・竜を・・・底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。」
(黙示録 20:2,3)

最後の裁きで「諸国民」がすべて滅ぼされているなら、「もはやそれ以上」サタンに惑わされる「諸国民」などどこにもいないことに訳ですから、サタンを封印する必要もないこととなります。

以上のことから、結論として「永遠の命（の見込み）」に入る人々とは、誰なのかという質問に対して、こうした答えが出せるでしょう。

どうしても矯正を受け入れようとしない、頑として子に口づけしようとはしない人々はやむなく、口から出る剣で、なぜ滅ぼされるのかを納得させられた上で滅ぼされることとなりますが、キリストの弟子であるという理由で、自分の持つもので、彼らを支援した人々、事態を飲み込んで、矯正を受け入れた人々は、みな「諸国民」ですが、「羊」として右に分けられ「世の基が置かれて以来あなた方のために備えられている王国を受け継ぎなさい。」と言われる人々であると考えられます。